

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	感情教育待望論（その10）：子どものことばが聞ける教師に： 子どもの生きざまとことばの生態
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 16 : 2 - 12
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045186
Right	
Relation	

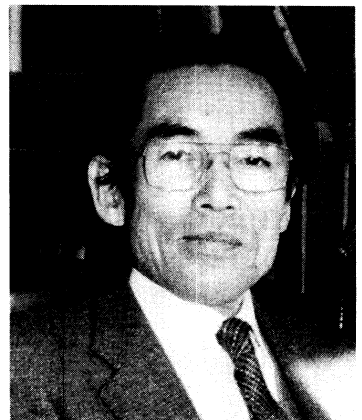


子どものことばが

聞ける教師に

——子どもの生きざまとことばの生態——

元玉川大学教授 上原輝男



1 ことばの生態研究

児童の言語研究というのは子どもの実態と離れては成立しないものであります。ところがどうなのか、子どもの方に近付けば近付くだけ、何か子どもにとっての言語というものをも「大人が所有しているものを子ども達にあてがっていくんだ」ということで、子どもがどんな言葉を学んでいくかという研究ばかりが行われているのが世間の常識でありますけれども、私がやろうとしている研究とは全く考え方が逆の研究で捉えている、そういうことになると思います。

それで私の方は講義題目としては「児童言語の研究」となっていますけれども、私が昭和四十三年～四十五年から始めている研究がありまして、「児童の言語生態研究」と呼んでおります。言語生態。ちょっとまだ世の中にはなじみの薄い言葉・概念でありますけれども、「言語研究には二つの行き方がある」と考えてくださればおわかりになろうと思います。世の中一般に考えている言語研究というのは言語の形態研究が多いわけでありまして。これの方がわかり易いような気がしてしまふものですから、主になされていく言語研究というのは一般常識的に言うところの形態研究になるわけで、言語を形の面で捉えて、その形がどんな風になっているか、という分析を行う。こう

いうものが言語研究だと思っている。具体的にもっとひらいたく言うと、文法研究なんていうのが常識だと思いがちなんです。言語研究というと言語文法を扱うんだろうとかいう風に考えられがちなんです。そして文法研究なんていうのはだいたい中学校あたりから始めまして、高等学校でも少しやるかもしれないけど、「面白くない学問である」という風に印象づけられている。そして言葉からだんだん離れたすわけです。だいたい「学校教育で文法教育を行うこともどうか」と思うように私はなってきたつあるのであります。もっとやらなければいけないのは、形態研究ではなくて生態研究だったんではないかなと思うし、それは上原輝男の考え方ではなく

て早々とこの考え方は打ち出されていたのです。日本で言語生態研究を始めたのは私です、とは言えないんです。生態研究っていうことを言い出したのは戦後すぐだったと思いますけれども、言い出されていたんです。これはますます発展していかなければならない研究方法であるし、子どもの実態研究と共にしか児童の言語研究はありえないんだ、っていう風に私なんかは考えているわけでありまして、子どもの実態と離れた言語研究をしてみても、それは言語学としては役立つかもしれないけれども、子どもの実態を明らかにすることはできないだろうと考えるわけです。

たまたま『はなぢがナンでえ』という本を、一九八一年、三年前に出しました。それは、自分達が今まで十何年間かかって集めました子どもの言葉を吟味し、一冊にまとめ、整理したのがこの『はなぢがナンでえ』であります。ですからこれは貴重な資料なんであります。私が原稿を書いたというふうなものではなくて、子どもの言葉のスナップをとったということがあります。それを黒柳徹子さんが激賞してくれて『徹子の部屋』にひっぱりだされたことがあったわけがあります。「面白くって楽しくて、最近こんな本をみたのはひさしぶりである」とテレビの中でも言ってくれたんですが、ところが私は、『窓際のトットちゃん』の話をかりをしていた。私は私なりにあの機会をつかまえて、黒柳さんのあの早口の原因は何だ

ろうか、そういう風に思っていて、言語生態の研究に役立てようというような魂胆があったんで、『窓際のトットちゃん』の話に自ずと切り換えた形になってしまったんです。でもあの批評家によれば、『徹子の部屋』であれだけしゃべったのはあなたぐらいである。徹子は唾然としていたではないか」と言われたんですけど、「そんなことは当たり前じゃないか」と思ったりしていません。

そこで、この本を資料としてここに持ってきたのはですね。「子どもの言葉を通して子どもを考える」ということをする事が児童の言語研究なんだということを皆さんにご理解願いたいという風に思うからでありますし、皆さん自身が勉強なさることも、書いてあるわけがあります。この『はなぢがナンでえ』の一番後ろの採集者の弁の中で、「子どものことはを聞ける先生になりなさい」ということを先生になるときに私がはなむけの言葉としたようであります。小学校の先生に、子どものことが聞けない先生がいっぱいいるんですね。で、親がそうです、だいたい。子どもの言葉を聞くかというところから児童の言語生態研究は始まるんだということでもあります。

2 子どものことばを聞き分ける

電車の中なんかでもよくわかるんですね。お母さん方が子どもとどんな会話をしているかによつて「これはいい母親だ」とか「この母親にかかつてはこの子どもはあまり偉くないな」とか「これは伸びないな」とかいうことなんでありまして。

やっぱり子どもと応対するには、上手な応対の仕方がある。上手な応対の仕方があるということは、子どものことばから「何がいいのか」ということを聞き分けてやれば、子どもはその次のコミュニケーションに入れるんです。だけでも、聞き分けてもらえなかったらコミュニケーションはそこで途絶えてしまう。そうすると頭脳の訓練はそこで止んだという事になるんです。

だから皆さん方がこれから現場の先生方になって専門家になるんだけれども、一般の人が聞き分けられないことばでも、「今あの子はこういうつもりで、こういう風に言っているんだ」というような風になって頂きたい。自慢話をするわけではありませぬけれども、私が小学校の先生方の中に混じって一緒に授業をするんですね。これを私は定期的と言っているほどに授業をするんです。現場の人達は、私が小学生相手にどんな授業をするのか見てみ

たいというようなことを言ったりもするんですが、その時に私が授業をすると、本当にひと味もふた味も違うんですね。それは私が上手に授業をするんじゃないで、子どもが動くんです。活動するんです。で、子どもが楽しげになるんですね。これは不思議なんです。小学生の前に私が立つだけで、子どもの目の色が変わってくれる。そういう術をちゃんと心得ている。

トットちゃんの時にも話したことですけど、人間がコミュニケーションというか話し合っている時にはね、言葉をかける。そこから言葉が始まるわけです。だからあの時に私は、黒柳さんのお母さんを褒めたわけです。「いやー、りっぱな教育がなされていると思う。それはトットちゃんの中で出ている挨拶です。挨拶の上手な子であったことがわかる。」と言ったんですけど、そうしたら、そこに反響がありました。「大変いいことをおっしゃってくれた」と一般の人から手紙を頂いたりしました。それから「日本人の教育として挨拶ということを言われたのがさすがだと思いますし、私どもが気が付かないことでした。また『窓際のトットちゃん』を読んでもそんな風には読んでいませんでした。さすがに専門家だった。」とありました。

そこです。威張っているわけではないんですけど、やっぱり一般的な読み方をしないで、その言葉を使う本人自体に至ろうとする、そう

いう姿勢をいつも私がつけているからだと思います。この本の中に、田舎のバスの停留所での小学四年生ぐらいの子の書いてありますね。団体旅行かなにかで、通りすがりのバス停でおばあさんがしゃがみこんでバスを待っているのを見て、その子が「おばあちゃん頑張れよ」と言ったというのがある。これなんか難しいですよ。何故頑張れなんて言うのだろうか。その時に、この子はこういうことで頑張れと言っているんだということが聞き取れる。これですね。一番生きた指導力とは何かというと、それはやっぱり子どものことをどう聞いてやれるか、これが一番大事なことです。

3 子どもにとって「待つ」と スツルム

何だと思えますか？これは。何故おばあさんに頑張れと子供は言いたいのか。これはまだ研究不十分なんですけど、「待つ」ということは大変なことなんです。人間にとって。私は「教育は待たなければならぬ」とこう考えている一人です。「教育は待つ営みだ」と思う。せっかちになつてはダメなんです。待つんです。どれくらい待つことが出来るかという事です。より素晴らしい教師ほど待つ事ができるんだと思う。待てない教師はそれは、粗末な教師です。

でも「待つ」というのは人間にとって大変なことなんです。そして「待つ」というのは難しいことなんです。大人になってからでも大変なことなんです。子どもが「待つ」というのは、そりゃ大変なことなんです。童謡の中にも『まちぼうけ』ってあるでしょ。何故詩人がまちぼうけの歌を子どもの歌としてあてがったのか。それは、詩人の直感が働いたんだと思います。子どもにとっては首をかしげることなんです。「待つ」というのは、「大変なんだ」ということは子どもにもわかっているんです。だからおばあさんを見て、きつと「おばあさんが待っている。一生懸命に我慢して待っている」こう思ったんだと思うんです。おばあさんのその苦労が僕にはわかる、だから頑張つてと言ったんだと思う。

今「留守番」という資料を私は整理しつつある。小学生の段階で留守番というものを小学生はどのように受け止めているのか、ということの資料を今整理しつつある。留守番の時に何があったかということではないんです。「留守番」というイメージ自体が子どもにも重くのかかっているんです。何故重くのかかるといえます。私はこれだと思えます。留守番というのは「待つ」という事を余儀なくされている。これが子どもにとっては大変な負担なんだと。世間一般の人は、一人でいることの恐ろしさ、それに耐えなければならぬから子どもにも負担がかかるんだと思っています。

もう一つ違う点は、「待つ」という事「をしなればならないから。こういう風な言い方もできるはずなんです。」「人生とは待っているものである」。いつでも待っているんですよ。最終的には死ぬのを待っているんです。違いますか？ その中途では花嫁さんになるのを待ったりね、私の恋人を待ったりね、そういう待ち方をしているもんです。だから待つ習練を人間というのはどんどんするものなんです。ですから、人間はそういうことを早くから知っているんですよ。親は子どもに待つ事をさせるんです。その一番手っ取り早かったのが留守番。「留守番していなさい。お母さんは〇〇時になったら帰ってきますから」っていうような習練を与えている。そう考えると大変面白い見方ができるのではないかなと思うんです。

4 日本人の「内と外」観

その時にですよ、「内と外」という感覚が非常にきれいに働いている。これはもう明瞭です。自分が待っている場所が「内」なんです。そして待っている人は、「外」にいるんです。で、「外」から帰ってくるのを待つ。この意識が非常に強い。待っている人は「外」からやってくる。で、その人が帰ってくるんですから、その待っている人は「内」から出て行った人な

んです。こういう感覚だけは、根強くそういう構造を持っていると思うんです。だから自分が最も待っている人が今の自分とは距離を置いているんだという状況を意識している。で、その時にですよ、日本人の内外観というのが面白いんですよ。不思議なんです。

この「内」っていうのは限界があるようなんです。輪郭っていうのが。「内」と「外」を区別している境界線のようなものがある。あるよ。なんだけれども、これはどこにでも引ける場所があるからなのかもしれないけれど、臆病な子ほどこの「内」が狭いんです。線を引くところが。放埒な子ほど、この放埒っていう言葉も面白い。このラツっていうのは、ラチのことですよ。「埒があかない」という埒なんです。埒っていうのは何かというと、この境界領域、これを埒というんです。で、これははつきりと言っているんだと思うのは、春日の若宮に行って「ああ、ここにあった」と思ったんです。しきりをしまして、お祭りが始まるまでえらく時間がかかるんですが、そのときに、そのしきりを、埒をあけてくれてお祭りに参加できるようになっている。その事を埒があく、埒があかない、と言います。だから埒っていうのは「内」と「外」とを、その埒を放つんですから、いい加減な子ほどその埒が大きい。

で、こういう抽象的な説明だけではなくて

面白いのはですね、臆病な子ほど動けないんです。大胆な子ほど行動半径が大きいんです。留守番していても。そういうのがきちんと出てくるんですね。「下にいたんだけど二階へあがってみた。二階へあがってみたけど面白くないから今度は下へ降りてみた」なんていう子がいるかと思うんですけど、お母さんを送り出したのが玄関だったとすると、玄関の次の間から絶対動けない子もいるわけです。二階で音がする、なんていうともうこうなっちゃうんです(硬直のポーズをとる)。で、後はどうなるかというと、ちょうど作文をとったのは冬でしたから、こたつの中へもぐりこんじゃうんです。「埒」をどんどんどんどん狭めていく。

それから一つ面白いのはね、子どもながらに知っているんです。怖さに怯えて、怖さから逃げる方法。何だと思っ？ そうなんです。寝るんです。なかなか寝られないとは書いていますけど、寝ちゃうんです。緊張すると寝られない。同時にね、緊張すると寝ちゃうんです。あのね、アクビなんていうのは退屈している時ばかりだと思われていますが、緊張すると子どもはアクビをします。これも資料は随分とれました。今度みせてあげます、ビデオで撮ってあります。ここの小学生を使っただけです。かけっこのスタートラインに並ぶまでのところをカメラでとらえてみた。そうすると、アクビしているのが多い

んです。これはもう緊張が極限に達したんでね。片一方の子は何をしているかという十字をきっている。緊張しているんですね。決して「一等賞になれますように」ではないんです。それは何故か、という問題の為に調べているんです。「走る」というのは子どもにとっでどういうことなんだろうって。走るっていうのは運動する事だ、なんて一般の人は思っているから大間違いなんです。子どもが楽しいのは、あのスタートラインに並ぶまでなんです。だからスタートラインに並ぶまでが走っているんです。つまり心が走っている。それから子どもってというのは面白いね。まっすぐ走れない。また走れるわけはありません。子どもは気分を走っているだけです。それを上手に走らせようなんっていうのはそれから後の話で、子どもが走っているのは一体どういう意識が働いているのかというのを、もって現場の先生の方から報告してくれなくちゃ困ると思うんです。

5 「ハマ」なる「アジナヒ」

そうして何年もかかって、やっとどうにか満足ができるような研究ができました。それが今一番新しい号で子どもの「喧嘩」を取り扱ったんです。これは決して国語教育の本ではないんです。あるいは国語教育はこの中に含まれているんです。「喧嘩」の中に国語教育は含まれるんです。国語教育の中に「喧嘩」があるのではないんです。ところが今学校教育でやっていることは、教育が輪をかけてぎてしまつて、何か国語教育の中に「喧嘩」があつて、「喧嘩」をどう指導しようかと思ふ事になつていくからつまらないんだと思うんです。「火事と喧嘩は江戸の華」。日本人は好きなんです。日本人の文化現象とも言えますよ、喧嘩っていうのは。少なくとも江戸時代はそうだったんです。喧嘩の時には喧嘩装束なんっていうのを特別にあつらえたんです。火事だつて火事の時には火事場装束っていうのを特別に作ったんですから。大石蔵之助が赤穂浪士を連れてですよ、全員が着たわけではないですけども、着ていった装束は火事場装束を着ていったんです。火事場装束はかっこいいからなんです。戦に行く時のあんな重い道具じゃないんです。兜も戦の時の兜ではないんです。火事用の、防火用のものであるし、

またかっこいいんです。それでないといふ江戸の火消しの纏もちなんで、あんなのどうして必要ですか。火事の際に「ヤー！」なんて、あんなの必要だと思ひますか？ 日本人は面白いんですよ、考えてみると。火事の時ですら格好つけようとしたんだから。あれを振つてですよ、そして一番燃え盛る所へ立てるんですから。そしてあの纏をめぐけて放水するんです。そういう実用的な面もあつたけど、それよりも火消し人足達の出初め式なんっていうのがやつてみたかつたんです。それは火消し人足だけの問題ではないんです。一般市民も火事場装束を持つているんです。カンカンカンカンつて鳴り出すでしょ、そしてたらタンスから自分のいい火事場装束をハッと羽織つて、サツと出て行くつていうのが江戸っ子のやりたいことだつたんです。みんなそうなんですよ。

6 「生きざま」は継承される

そういう生き様、だいたい「様」っていうのが日本人の受け止め方なんです。「容姿・スタイル」は単に服装だけではないですよ、あれは。「姿」が入るんです。姿って何ですか？ 次のように言つていふ文化学者もいるんです。「日本の文化は型の文化だ」つて。お茶なんてみんなそうでしょ。お花でもみんな型ですよ。どう

(道)と名がつくものはみんな型でしょ。型が無かったら何ていうの? 「型なし」だよ。ところが今の文化は型なしになりかかっている。だからこういう風に考えると、子ども文化から大人文化、大人文化から老人文化、そういうふうにして伝承されていくんです、文化っていうのは。その伝承の歯車は今どんな方向に向かいつつあるのかという為に、諸君らはここを専門にしようということ、小学校の方へ近付いていこうとしているんですよ。そういう気位を持ってください。一介の教師なんて、そんな『教員』なんてなるな! つまんない。そんなことやるからだんだん日本文化は弱まっていく。皆さんは文化の実践者ではないかもわからないけど、文化を大事に見守っている、そういう役につくんだと思ってくれなくちゃいけない。そして子どもたちに、どうそれを継承させるのかという立場をとろうとすることではなくてはいかんと思っています。

ところがすぐ「型の文化」なんて言っちゃやうと固くなっちゃうんです。「はい、起立! 礼!」そんなことをやるのが型の文化だ、なんてそそっかしいからすぐになっちゃやう。「世の中少し墮落してきた、道徳教育を強化しましょう」そんなことばかりやっているでしょう。本当の事はわかっていないからですね。「道徳」っていうものは発生していく、成立していくんです。「道徳」があるのではないんです。「道徳」を見出していくんです(※編集部注)『道徳の発生』。あの教員免許法の中に「道徳教育の研究」なんて、ああいうのがダメにしちゃうんです。「道徳教育」なんて言い出してからおかしいんです。道徳教育というと「道徳」は手段になってしまふ。「道徳」が手段であるはずがないんです。

7 「見栄をはる」という「構え」

もう一つ難しいことを付け加えておく。例えば『ポーズ』っていうのがあるでしょ。この『はなちがナンでえ』の中にも書いたんですけど、子どもには子どものポーズがある。あのポーズを追っかけることでもあるんです。しかしまた「ポーズ」だなんていうと、あの「全員集合」みたいな「ハイポーズ」なんてあいう風になっちゃうんですよ。だからポーズっていうのはあまり使いたくない。「構え」。これは、日本人特有だと思います。東洋人に特有なのかまだその辺はわかりません。見栄っていうのはこんな字を書いたりしますけれども、これは「見え」ですよ。我々の視点・視覚の固定を見栄と言っているんです。人間の動作・人間の行動っていうのは絶えず連続しているんですよ。皆さんの行為も全部連続しているんですよ。私の行為も。カメラで撮ったってカメラの速度に合わせて一コマ一コマ撮れるだけの話なんです。そこで停止しているんじゃないんですよ。全部連続しているんですよ。だから八ミリで撮って見たらダーツと連続しているじゃないですか。連続しているけれども、あの一コマ一コマを取り出して意識することが我々は可能でしょ。その中に我々が好む一コマがあるハズなんです。あるんですよ。「格好いい」っていうのが。そういうことが出来る感受性を持っているんです、日本人は。何故なんでしょうね。これは文化人類学的に考えても面白いんですよ。「見え」なんです、どこを取ったって私がこの人(と言って学生を指差す)を見ているんですよ。みんな見えている。どこも見えている。ところがこれのどっかを固定させるんです。そして自分の脳裏に焼き付けるんです。「あの人の横顔、何とも言えない」なんていう風にね。それが見栄なんです。で、こちらの人間がそのところに焦点を定める、そうしたら、「見栄を張った」ということになるんです。それを別の言葉でいうと「ハイ、ポーズをとった」というなっちゃうんです。だからいろいろなところで全部ポーズがとれるハズなんだけれども、選ぶところと捨てるところがあるということなんです。長谷川一夫が死にましたけど、日本で一番流し目が綺麗なと言われた役者です。本人に言わせれば、大変苦労したそうですけど、あの流し目は。長谷川はもともと歌舞伎役者ですから、型があるんです。歌舞伎の型を映画的に自分

で工夫していったんです。それにしましてもですよ、「流し目」っていうのもこの眼球運動に違いないわけでしょ。運動っていうのは絶えず連続しているわけでしょ。その一つの動きを流し目というわけでしょ。そうしたら目の動きの中にだって、「この目は」って意識にとまるところととまらないところがあるわけでしょ。その目をすれば人が何か意味を感じるところがあるわけでしょ。感じないところと感ずるところがあるわけでしょ。「お前あの時の目付き、私は〇〇思ったよ。無理もないでしょ」って言えるっていうのは、我々の意識とその運動とが結び付くところが整っている。それを子供がだんだんだんだん獲得していくわけじゃないですか。それが言葉でしょ。大学生にもなって流し目一つできないなんていうのは今日の女性なんてだらしもないもんなんですよ。できなくともいいけれども人の流し目を見たら「ああこういう意味だ、この人はそれをわざとやっている」とかね、それぐらいは大学生は理解がでさなくちゃいけない。大変ですよ、そうやって成長していくんですから、人間っていうのは。

8 「構えをよめ」 よういふ

それをやっぱり小学生は小学生なりに表すんですね。まあ、かわいそうなところが一つあ

りますが、例を出しましょうか。

これはちよつと酷だったよ、とこれの採集者には教えたんですけれども、

入学式の日。

かずお「ぼくね、おねえちゃん、このがっこうにいるんだよ」教師「そ、う、いいわね。ほかにこの学校におねえさん、おにいさん、きている人はいないかな。」ひでいち「ぼく、おにいちゃんはいるけど、このがっこうには、きていないんだよ。」教師「あら、そう。」ひでいち「たまがわがくえんなんだ。」教師「へえ、それで、君は町三小ね。」ひでいち「うん。」と下を向いたはずみに、眼鏡が落ちたが、しばらくの間、拾えずにいた。

(一年男)

これは「先生、あなたはひどすぎるよ」と言った。こういうことなんです。わかるでしょ？ せつかく子どもはお兄ちゃんがここにきていないんだ、と誇らしげに言ったんです。来ていない理由はこの学校よりもいい学校に、日本中で一番月謝が高い学校に、玉川学園に、つてそこまでは良かったんだけど、先生「それで、君は町三小ね」って、あなたはダメなんだねって。だから次に眼鏡が落ちたでしょ。でもその意識が強いものだからサッと眼鏡が拾えなかった。あることなんです。一年生でも、もうがっかりきたということを表

すんですから。ひどいときには泣き出しますね。ポロポロと涙がこぼれる。私は小さい時にそうでした。人がなにげなしに言った言葉が頭に残る。

その次に喧嘩の話が載っています。この本の題名にもなった「はなちがナンでえ」

「先生喧嘩しているよ。」の声に教室にいつてみる。あさい君とまつだ君がけんかのまっさい中。あさい君がまつだ君を強く押した拍子に、まつだ君はつくえに顔をぶつけてしまった。まつだ君の鼻からはなちがたらたら……。押したあさい君はびっくりして、あさい「おまえ、鼻血、鼻血！」。ところがまつだ君はうでで鼻血をさつとひとふき。たったひとこと。まつだ「はなちがナンでえ！」まわりにいた男子は「エーッ！」と声をあげる者、あせんとする者。それからしばらくの間、わがクラスの男子の間では「はなちがナンでえ」が流行語になった。

(四年男)

かつこいいんです。これを普段言っている子ではなかったんです。やってみたくてですよ。今女の子の言葉が崩れた崩れたって言っているでしょ。男と同じような言葉を使う。やっぱりこれは知恵の足りないような子が真似をするんです。だから男子にはこういう変化はあまり起こらないんですけど、女子

におこしやすというの、自ら女子は自分の知恵の足りなさをいっているようなものなんです。だからだいたい男言葉遣う中高生なんているでしょ。「僕が」なんてわざわざ言っている。しばらくはいいんですよ。一回二回は相手を笑わせるためにそれを遣ったというなら、それが習慣づいてしまっているような子はお粗末ですね。「構え」っていうのは「構えをとる」ことの勉強をしているわけですから。(自分が話している時のポーズについて)これだっつてどっかで身に付けたんですよ。最初はこんな格好でできなかったですよ。授業中にですよ、こんな所に半身で構えてね。こんな風になんかね。だいたい教育では半身に構える、ということを最初に覚えておいた方がいいですね。真っ正面を向くというのは恥ずかしいんです。人間は。相対して真っ正面っていうのは、一番いい姿勢ではあるんですが、初心者がこれをやるとこの列だけしかみないんです。目が自由に動きませんからね、最初のうちには半身に開いてやりなさい。最初から全部つかまえようとしても無理だから、半分ずついけと教える。今こっち向いていたら今度はこっちつて。こっやつて小さくするんです。教室を切つて。で、いつでも先生は半身をみせる。この半身を使えるようになったら楽になるんです、板書が。半身のまま字を書く。こういう習練をするんです。これは(真後ろになっ

て板書)一番ためなんです、背中には目がありませんから。その間にこっちはガヤガヤやつてなっちゃう。だから意識を切らないということなんですね、先生は。それが視線を切らないということなんですけど、それにしても我々はそうした構えを獲得しているんです。どの商売でも何でもそうです。そしてその構えの取り方によって、「あの人はずいぶん世慣れた人だね」とか「あの人は少々堅いんじゃないか」とかいうような判定を我々は下しているんです。人間は。

構えっていうのは何なんだろうかって、この研究をしている第一人者はですね、私です。他の人はあんまりやらないから。これはね、自慢話をしているんじゃないですよ。考え方を言いたいから。先程「内と外」つて言ったでしょ。意識の構造のパターンには、「内と外」があるつて。

9 「前後感」と「構え」

「構え」には、どうしてもこれがあると思うんです。「前後感」。これがどうしても日本人はうるさいんです。前に立ったか、後ろに立ったかというのを日本人は非常に意識している。神前に向かつてというのもそうですしね、なんかもそうですよ。「太郎かじゃであるか」「へへー、おんに候」とか。この前・後ろと

いうのは非常に大事なんです。(講義の位置についての実例)相手を見る時だつて、頭のてっぺんから爪先までこっやつてみてごらんない、たいがい気持ち悪いつてなっちゃうでしょ。だから男の子が女の子にもつてよつか、女の子が男の子にもつてよつかというの(ま)づかい・目づかいですね。そういうのも関係してくるんです。「あの目付き嫌いだもの」つて。だから「目と目」というのは大事なことであるし、それは構えの大事な点だということにもなるんですよ。それを前後感というんです。真っ正面、それから斜め。斜めつていうのも大事なんです。斜めは「崩れ」なんです。半身というのは前後を捨ててるんです。真っ正面を捨てておいて斜めにする。崩れの姿勢なんです。最近電車の中で、きちんと座っている女子大生なんて滅多にいない。座つてね、真っ正面に座つてきちんと手を膝の上に乗せている女子大生なんてまずいない。どうですかみなさん。ちゃんと真っ正面に座つていますか？ 楽なんです、外した方が。だから自分はいたいいどつちに膝を寄せているか。そうして見せた方が長く見るとか。関係ないよ、そんなの。どつちにしたつて短いのは短いいんだから。それよりも、こうさせているのは真っ正面に座れないつてことですね。だからこそ日本人は「正面を切る」という言い方をするんです。だから今度座る時には真っ直ぐ座つてみるという習練を教育者はしなく

ちゃ。自らやつてみないと。自分で自分の体の中に問いかけていかなくちやだめだ。それがなくて女子高校生なんてどうして指導なんてできますか？ だいたい半身で構えているし、ひどいになると足を組んでいるでしょ。あれだって足を組んだ方がカッコいいというより楽なんです。足が楽なんではなくて精神的に楽なんです。つまり崩れた方が楽ということが一般的になりかかっているんです。しかし日本人にとってはあくまでもそれは崩れだということは考えておかなければならないです。正しくは正しいように座れなけりゃいけないですよ。入学式や入社試験の時だけ真っすぐに座ろうとしようとしたっておかしいんですよ、慣れていないから。なんだ今日だけとってつけたように座っているという雰囲気が見破られるんです。だから日頃からちゃんと座る練習をしておかなくちゃならないですよ。

前教えたね、座り方は。上原式というよりもこの前言った藤岡流ですけど。藤岡先生(※編集部注)が教えた座り方です。知らないか？ ちよつとやろう、サービスだ。背中はよりかかれないで背骨は真っ直ぐにしてごらん。そして手は膝におきなさい。自然に。組もうとしたりしないで。そして爪先はそろえる。そして一旦その足を前に延ばしておく。そしてスーツと手前にその足をひいてくる。そうすると自分の肛門を意識するところがある。そこで止

める。肛門を閉める感じで意識するところがある。あるはずなんです。ないなんておかしい。その位置が肛門の位置と背骨の真っ直ぐになったところだということです。そこが足の位置なんです。そしてそこが一番人にとつて楽だし、極めて自然な場所なんだということです。だから入社試験で座った時にもその形をとる。気分的にも楽なんです。今見ている、ピシーッと座っているというんじゃないやなくて、自然で極めて品がよく座っている感じにとれるから不思議だね。

構えの話が途中で止ました。これはね、卒業論文にだつてなるんですよ。この「前」っていうのはどこかって。どこまでが前なのか。確かに皆さんは私の前にいらつしやるんですよ。でも前っていうのはわからんのですよ。ところが日本人は、この「前」を発達させている。特殊に意識しているものがあるということです。すぐ思い付く言葉は「上原先生は男前だ」っていうような。この「前」は何ですか？ これはハンサムボーイなんていうこととは違うんですね。美男子なんていうことではないんです。まだあるんですよ、「腕前」とか。あの「前」はどこですか？ 腕の前なんて。まだまだあるんですよ。「君の名前なんていうの？」この「前」はなんですか？ 日本人は「君の名は」と尋ねると、「君の名前は」と尋ねるのとでは区別できていたんですよ。君の名は、なんて尋ねてはいかんのですよ。君の名前は、というの

が正しい尋ね方なんです。これから気を付けてください。「あんたの名は？」というのは、その人より身分の高い人が尋ねる場合だけです。「名をかけ」と「名前をかけ」というのもね。それが万葉集の一番最初にでてくる歌なんです。野で摘み草をしている乙女たちに、「お前、名前をなのりなさい」とおっしゃる。今でも日本人の神経の中に残っている「あんなの名前は？」って知らん人が言つた時に女の子は言いませんよ、なかなか。ニヤニヤとしていながらも教えない。名を言つたら、その名を自由にしていいということになるんです。そういうものを持っている。名は魂ですから。日本人の考え方はね。だからしよせん「名前」までなんです。

10 子どもの言葉が聞ける教師に

さて、これから演習形式によつて、この本に収録されている子どもの言葉をそれぞれの担当者、自分はこの言葉を会話をこういう風に私は解釈する、こういうことが言いたかったんではないかということを出してもらいます。そしてその見方を深めていくということをしばらくやってみたいと思います。君達の先輩の、神戸の兵庫教育大大学院に進んだんですが、その修士論文として大変素晴らしい論文を書いた。それは「子供のあいつの研

究」。今までなかった論文です。あいつちつていふのを、どううつていくか。あいつちつていふのは日本語の特徴なんです。知っていますか？ これは専門家がおりました、その人が言った言葉ですが「日本語はもつつきをしている」って、うまい表現をしている。ベタンベタンやつてそして手をいれていく。相手のあいつちを受けなければ話が進まない。黙っていると勝手にしろという感じになるでしょ。あいつちが入らないのは講義ぐらいなものです。皆さんはあいつちはいれないもの。ただ、こうして話しているとうなずいてくれる人がいる。そうすると非常に話しくくなる。そのあいつちをどこで習っていくか、子どもたちはどんな風にそれを獲得して、どういうあいつちを打てるようになってきているかということ修士論文としてまとめた。子どもをこういうふうにつかまえてみると、子どもの言葉についてのはやるのが一杯ありますので、勉強して頂きたい。では今日はここまで。

※編集部注

(上原輝男『道徳の発生』より抜粋)

大義廢れて仁義有りというが、残念ながら道徳発生の胎動に耳傾けるほど現代人は悠長の価値を認めようとはしない。事々しく多忙であること、世事のテキパキとした合理的処理能力だけが当世風と信じて疑わ

ない現代人が、生活の安全弁として道徳教育の必要をいう。だから彼等が言い立てるのは、道徳ではなく、道徳教育である。つまり、道徳を世直しや子どもの非行防止に役立つ対策と考えている。そしてそれが教育だと心得ている。だが、それだけが子の非行に泣いている親が、即効薬を求めている時代なのかもしれない。

「我々の道徳に関する考えは、理性に重きを置くが、理性は感情から発している。感情を型としたのが理性で、それが道徳の外廓をなすのであるが、それは、どこまでも外廓であつて、ほんとうの力はその内の感情にあるのである」(折口信夫全集十五卷「道徳の民俗学的考察」より)

これが折口博士の道徳に関する基本的な考え方である。この考え方からでは、道徳は感情生活と対立したり、抑制したりするという考えは導き出されない。ましてや感情生活の抑止や矯正のために道徳教育を必要とするなどといえば、それは全く為政者的発想で道徳及び教育の本質のわからぬ者のいうことになって、論外といわざるを得ない。道徳教育という言い方自体、教育的でないことになるが、また一方、博士は、道徳の中味そのものは時代に從つて変化するが、変らないのは道徳に対する感じ方で、昔も今も同一だとする点からすれば、道徳教育を標榜する立場などは、さしあたりその道

徳に対する感じ方のデモンストレーションと思えばいい。

「情」は我ながら我が心に任せぬから、道徳があるのではない。道理にたがえることには感ずまじきわざであるにもかかわらず、忍びがたきふし有りて感じてしまう情念にこそ、人さまさまの生きさまを見ているのだといえる。単に我がままにすぎないものから、いわゆる心中立てという情念の証しのために殉ずるものまである。折口博士はこれを道徳的興奮とも、公憤(おおよげばら)ともよんでいる。さすがに、絶妙の指摘だと思ふ。道徳が生きて人々を吸引し、行動の動機づけとなる時、その時本来道徳たり得るのであつた。人々はよく、許し難い、という。これも道徳的興奮であり、公憤というものである。それは冷い理性による判断力ではなくて、負い感情に身を委ねてよいとする行動力である。朝に道を聞かば夕に死すとも可なりとまで思う生きものとしての感慨は、同時に道徳に渴仰し吸引されて五体投地する人間の姿態でもある。

怒るという人間感情は一体何であつたのだろうか。歓喜仏はとにかく、忿怒仏に現代人はどう接しているのであろう。興奮、特に怒りの感情には、今日の人々は価値を認めない。おそらく暴力に直結することを恐れるからであらう。現代っ子は喧嘩しない。しないというより出来ないといった方が正しい。

